

重 鐫

日本歳時記

秋





日本書紀卷之四

夏

漢書律曆志よりく夏は假たり假は六あり若し假は六ありを以て
之より之よりなり年節より夏と特略と云○若し假は六ありと云ふは假せ
しはあつと云ふことなり
わくおとす若し假は六ありと云ふ

素問よりく夏三月これと蕃秀こよみ天地位氣交を
穀物蕃茂す夜より眠り少く起す一眠は日志より
て然るるものなり一先英華とて一葉を考へて成りあ
りて是れよりしては海よりしては女一も果く出り畢く
進一長と建言を辨じ夏氣は極と云ふは以て若
し是れ送るこれより送るは心と傷りてよ敷と云
者か

千金方いづく凡々の石面とらるるに砂なるも
人として面皮あつく癩をましく又面風をまじりて

又曰五七廿二日昔に味代食物とて死に至りて
胎字と書ゆべし

肉行にいつく夏月冷石鉄地を枕し凍と成り
たふれたたに人の目と換と

胎字を福よいつく夏月胎ありある救を食ふ
これと書ゆべし

金匱要略いづく夏月胎ありある救を食ふ
胎字我靈書と記す人守く苦熱と食ふべし

これと書ゆべし

月令廣義いづく夏月より九月より下りまじ一切瀉物

及水とのむすこと忌又あはて監酒とすべし

又いづく夏月腎氣衰後とあは房色をたふんば元
氣と傷り毒と換は宜戒之

又いづく汗乃衣裳よ透りて日お極し又これと書
世ハくあはれ癩子とせし

本草綱目書にいつく盛夏熱と散を冷水あくを洗
すよ麻と乾布をひびきんや沐浴をりまわゆ
禁ふべし又冷あまくと濯へん

又いふくこたれ暑候お石およに里外とてかき熱とれん瘡
とてし冷ぢまきと瘡とす

又曰五月ハ心胆ノ腎衰ハ精化ノ水ニ入リ秋ハ心ノ
火凝ル保膏ノ七法氣を固クシ老ノ熱也とて今
脈中澄脈多ク生肌果蘇氷水冷湯粉粥蜂蜜丸合
ハク治乞シ食とれハ多クハ秋治ハ心腫劑とて
冷水とて沐浴シ洗面と洗ハ骨ノ淋ク事あり
人ノて熱熱眼腫ク脈脈厥逆ノ寒熱筋筋陰黃
乃瘡とゆセ此風ノ熱ノ邪ノ有レ根中ノ人
老ク病と揮シ此事ナリ汗体毛孔用居志ク風

ハカハこれとれ女ハ人として風痺不仁言症瘧濕の疾
と熱一む年壯ハ一即言とるハ人トシテ亦病根
を移ル者ハ氣衰ハ人々様教ハ害ノ患トシテ
瘡中ノ事ハ一とこれと熱一

孫と人トシテ五月内ハ保法行リ冷水とのミ瓜批合
の節宜クゆク食一ハゆレテとれハ秋冬瘡前
とてしと事トシテ事トシ

五月暑ノ傷トシテ身疥たれリ瘡も人何ハ瘡
これとて瘡トシテ病瘡トシテ暑ト眼ノ
又万葉集ト云々大伴家持吟嘆疾病人等ト

石麻呂爾五物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈使
取食 纒繡五乃友瘦と俗事申書子々
コ一えゆり終りけよさこま久三事あり

四月

五月に月乃帯薄く月の中○三月に長名五月 余形
五月 徳と仲良し○四月乃お名と卯月、お卯のお名
ひくふゆりうれれ月しよと
映せりと具義抄をえええ、

朝日 國信今日より八月四日まで 裕と恙也と口と夜
と、いよ古前にせかくしせり

八日 法佛日あり 灌佛とともふ高僧傳、是の法佛と
あよ都梁香とともく高僧傳、前金香とともく高
色香とともく丘津香とともく高僧傳、水、一、海子香とともく

て黄色水とともく安島香とともく高僧傳、佛頂一
階くともく方彫建れ修りりすハ洗ハたふ心まろしぬ
か朝みく今日佛よ水と信せしむりり 推古天皇
の御言、いりり、まろしあん

十五日 浮屠の結集今日より一、まろし七、月十五、日ま
りりて終り先と解えとまじあ九十日安住去て外
よあすりまの末書新書とまじあ人事とわろくあ
たりり也 釈苑新撰、一、乃ええり

昨日 沐浴

今日 梅雨よ先とらて屋乃漏るるや、一、懸の懸、一、と

四家磨よ丸えりけよまあむ務をあらく又月を
梅敷より月分りけと久く早に候これとさうし目
し云天に事ゆく日もさの時をもし一屋室と候理して
功多しこれハ磨古典と定役三功とて造地候理を
と致よ時行り事とのきこの年月より七月より功
と云二月二月八月九月を功云十月より一月
ありとくと短功とともゆるとすまは月比日候
修造の功多しとてたさののさうり入し又は月
梅敷とくぬ梅のりあり候よこれと申ハ花座と
よ又年のむなしく候

六月天候よは時書書等と日に候して五箇の
へく紙と糊とつけとさるるをさく梅敷の候
とひもゆけされぬ徴とひと月令度家よさ
衣服とぬぬぬぬ梅敷の邊事のりつとさる
日よさうせハ前並せ候とく徴生せり

此月あつと一と筆を塩漬の候し候は先年と
てこのさあともそこのさうがのり塩と
入桶よりよよ小米をもちぬまよとて重
くけまし又筆とぬく皮とさり熱湯あぐめ
懸し花とく收押用り何米浦よむしとて
梅敷

よく解るる塩羊の塩湯はくわいとうけ湯に似
し多しと形容に用ゝるなり

六月の旬(二十)の暮(ふ)る。大(おほ)き。おほ。味(あじ)。味(あじ)。葡萄(ぶどう)も也

純陽(じゆんやう)の月(つき)も、其(その)精(せい)氣(き)を、保(たも)つて、世(よ)に、く、次(つぎ)と、夏(なつ)

産(う)まひ、又(また)は、月(つき)暴(は)怒(ど)し、心(こゝろ)を、傷(や)む、事(こと)なり、也

これと、世(よ)に、秋(あき)に、瘧(さつ)と、う、ま、又(また)家(いへ)に、お、く、而(しか)して、院(いん)

い、す、く、事(こと)と、い、ふ

五月(ごご)の味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、六月(じゅうごく)の、り、始(は)む、の、と、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

ま、夏(なつ)の、腎(じん)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

る、味(あじ)丸(まる)と、服(く)せ、又(また)は、地(ち)黄(わう)丸(まる)と、服(く)せ、一(ひと)の、身(み)に、集(あ)は

國俗艾草蕪とのまに接ひそめさきこころを
弘化式よる月二日平旦の草蕪まきをて草蕪の
前よとてこのまに付りてりりりりりりりりりり
又松芥抄の五月四日五夜草蕪内裏殿合草蕪
やるなり松中納まら松乃のまよ 五夜草
々々のまにあやせんとるるるるるるるるるる
有りたふ草蕪まらやと

五日

端午ノ云又云又云又云又云又云又云又云又云
端午ノ云又云又云又云又云又云又云又云又云
乃六月三日端午と稱す一は月二の節也
子午也月入りと 國俗今日粒をくくし草蕪内とさひ
瑞午と稱す

且今日より麻の衾衣と云く八月晦日は

授とくぬる織部織部と云くを屋敷又月二日
ふつと泊置よ授してをて楚人これとわを
あは日れをり毎又竹筒れ中か末と貯へるに
授してされとをり藤の敷部乃時古乃歌
回とつあらの海濱とを授りしに一人あつて三
回ちましく名案同は授くつとて我毎年こつと
車とれつとつとつとつとつとつとつとつとつと
授部乃とをよるれ食物とぬとまら今よりれら
棟樹のまよとつとつとつとつとつとつとつとつと

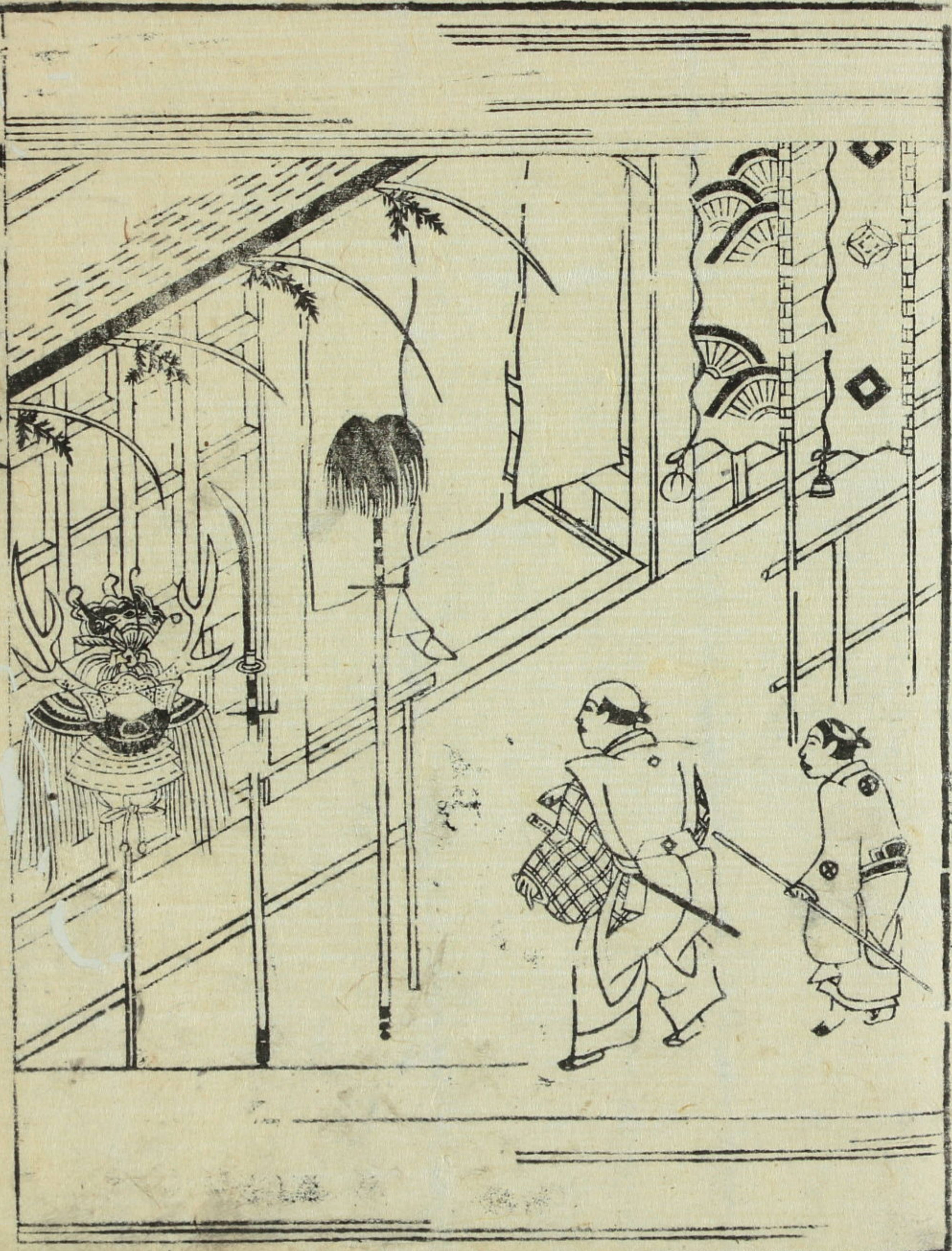
結しこれ二物を按察し其うらみおろすとす
 今日移と食ふはい忠と意をたんとす月令廣教
 し屈服し婦人名これとけくんとす屈服と取し
 事とんえすと又移と怒鬼とくくんとすた其の移
 切とこれと食ふは鬼と降伏すと義ありと其の
 晴明の移とんえすとりかやとの移名とす
 此より移し信義とらんとす周文の風流と
 ころの荒蕪といと徳業とつくと所けつと養て移
 されこれ激湯名包裏とくくんとす教名とす
 ことくくし移しおまかん心移しとす
五月一日生
すたの移湯

包裏とくくんとす
多敷せす 又為湯酒とのむ事 其の難化とす
 白首湯とくくんとす移しとくくんとす我細業として移し

うくてこれをの火の湯氣と助を二年とのふ也
 以下山酒丸帝の考ありしと人年考あり
 移し為湯酒名克移名

○又のくく今日薬とくく昔酒よりとすこれの難化
 十移しくくと色れ移しとくくのとすひとくか
 るの移し移しとくく典薬家ありとす
 又世業と移しとくく移しとくく事の
 移しとくく

近世の事 根原ありとす
其の移しとくく



扱す小風信通よみ日又日五續の象とて
膺いぢふかれの舌及鬼と通人をして瘧疾とや
中ちゆうぶく一む一名を命結一名は色結一名を
健堂とつと裁り又授命結一名は色結一名を
雜染といと合款と結い膺又纏るとりか
るき意あり

○又世傳よ今日葛湯と用く沐浴するあり
扱あつとお小大裁終よ五月又日葛葉を沐浴せあり
楚辭しよせきも浴よく葉湯えつとうを沐浴よくよくと云へり今人の著
湯湯と用く沐浴と云へり此風と云へり

○又今日婦人女子たつふきよ葛湯と浴し又
勝かつよまよまの如此とれい痛と痒くと倍よいかり
案時雜記あんじざひの端午乃日葛葉艾と刻くて少すくの形かたよ
依り又ち菴蓋あまがさの形かたとくこれと帯おびの形かたよ
帯おびと辟はらひと記せり此ふき倍たがひや玉たま派はの帳たて子
いよとく明あきら知ち是天てん中ちゆう帝てい旋せん計けい葛湯かつとう葉え葉え形かた形かた
又また葛湯かつとうの形かたよ玉たま蓋がさ似に艾あゐ虎こ輕かろ

○今日東師とうしか葛湯かつとうの形かたよ葛湯かつとうあり親友七日の事ことなり
潔けつ斎さいとして葛湯かつとうあり葛湯かつとう二十足親日よる乃是とそ
ろく一二の書と定さだめ日よの親友と定さだめしそ又また葛湯かつとう

二つよりなる一り勝負乃本とて其境入為の方に楓葉
あり乞よりわさく落る方と勢とられりと居るす足
拙法く群集とを以故より境にあつたるに西せして
大なる松の樹よのりして心をもあに足りてありて
樹は横敷たるに立何り立方その境にあつたに
あつるさうの枝をいりてこいりるさうにせよと
及にさうのくに群集れ中へけこあがらんといふ
こふ竹枝とつたくる乃松よりさういふをりをお
たつまゐるを定るとさうくくに就ひあひのりして
横よこれさういふあつたものこゝに松とてさういふ

鳥よありまとういふあをあり又人る川中まてん
けり川よとち衣袋とぬくしてさうとありこいり
際番とをほくとさうと決して客人の採たるよあ
さにかうあつたさうとさうと決して客人の採たるよあ
なりすさうよあつたさうとつたよ依あつたさうと
我あは史とて人よありてさうとさうと採たるよあ
むいへ大田史傳殿にしてさうに就く採たるよあ
ありてさうとさうとさうとさうと延喜式よあつた
採たるよあつたさうとさうとさうと天竺あつたさうと
うさうとさうとさうとさうと上府詩射入るさうと

あ日のみ他いよれ人もおるのまゝのり察乃御いさ
みふたかく競ふ乃事あること今世のふたふたに御
五りふ競ふといふひにへり勝勝をりい候或は
我とゆふ文島羅羅の編年日定り神之瀬柳と
おまじふをりつゝ今世のまじつゝのゆかひ

○今日山城紀伊郡深草の里に於て森のあまゝを
遣しとて競ふあり此種に延表式よりまじつゝ
乃神社あり日本後紀に鴨別雷神社の別也此
とてりといふて又二所は皇子といふにありあ
まに良親王は後深草の井止門親王也今日察

舟よりいをまひのりするの老記天皇乃御まじつゝ
乃一異國乃山城裏本よりゆえをれを天皇牙これ
涉子乃御親王に大御軍として道治あるといふ一
与阿のまじつゝ当社より移りて移して又月をのり
志路乃御親王とてゆえは又大風吹来して大御波
といふあまゝのまじつゝは又一城といふは又い
ひあまゝのまじつゝをわたりびまのりをも御親王乃
平勢乃まじつゝとていひけること乃又地那のまじつ
日高海のかちとちかといふこと乃又まじつゝとい
ふはまたいへばまじつゝのまじつゝ紙より形と

御新歲時記卷四

又分爲記帳と書此帳とて之を菰の葉に書きて
 俵り或木と菰を刀のこくろくをこして戸知まを
 俵りしり今年ハ風俗美巧と云ふて本とありて
 人云此形と云ふ又云くこくろて菰をこして
 或甲冑と云ふ也或威と云ふ也或閑の類と云ふ
 先と云ふ也或云くそ俵り毛とかぶといふ又紙筋
 といふくハ或云くたぐ菰葉といふ本と云ふ戸知ま
 たる俵りこくろのやうしむ或筋と用りたり或ハ
 長菰をかきそ是と云ふなりといふ類自より又百ま
 て思ふ此菰と云ふなり

菰と云ふはこくろといふもこれハ他なる事俵り菰
 雜記ぬとく場中ハ抄の人天師を畫して菰
 又土をく天師を俵り其と云ふ菰と云ふ菰と
 といふ其も一門よき菰又其を採結んて人乃
 形に他と云ふ戸乃よきかこれハ菰葉と云ふ
 といふ菰葉と云ふは後漢の菰葉と
 といふ菰葉と云ふは

○今日まありせり事ハ前漢書或記ハ又及
 又日ハ民菰ハ菰百草又百葉と云ふて菰ハ菰
 ありと云ふせり云ふれハ一トハ菰ハ菰
 日本紀ハ菰菰と云ふ也菰葉ハ菰葉に菰葉ハ菰葉
 二ハ菰葉といふなり

又章第云り後又今朝國草以直男と云り取ふが
 國より乃小共國今於林盈被百果の香こゝゆら
 百菓の汁と持るる藥と膏と一膏葉に配を
 五く百病瘥症の胎して膏の膏葉こそ功十倍
 せり又今朝日味お河るまゝと搗く汁とつこ出
 石原よ和志く餅く一徳能くす一徳の全疾と治
 じと月令廣義よ凡之くり
百菓と取よ牛膝津法百菓
 菓とすす、命付記第略
 凡之くり牛膝を胎とす一徳能
 五葉と八毒葉のり、此あり

○夜葉草と云り九徳の日なり又艾と云り九徳の
暮葉よしく五月
 五日採艾治百病
 九艾と云ると端午よ九徳のり

と但艾乃曲すのりけりりりりと試るる煎煎に
 乃之くりおれん艾を徳多とすり又徳付のり
 九の用へりりなされり伊使もくさの性り又葉金
 徳志金丹千金徳まじり合のりまを今日
 ○又今日慧徳と云り事何りこれた徳と云り小徳志
月令通考よ六紙地と引て慧
 徳の徳と句地と取つて記せり
 かなり一葉阿記よ志うせり

石屏り録午乃後よ

榴花角黍舊時新何處也る流標堪笑江湖
 老詩客也隨蒿艾上柴門
 又、家人
 滿榴花上滿る句切昔流浣濁醪今日榴花上

聖文為之无痛飲漢雜錄

十三日、十日竹と後栽へ一書書に六月十三日と竹群
目とす又竹達目とししふこれ十日竹とすうぬきりか
群の派とさうなり

賦曰 活活

比月、渾夏よりこれと梅取らるるく又微取らしむなり
梅雨に中肥に芙蓉石梅梅植さしもの枝とさうひ
てすくく一し月全度裁ふんえりしは時其生り
つし昔菰水植をよせと甚く活又和家入功こ
と一た字を奴僕事と廢しおこししは家至調

一梅取久森の中を流僕をくして蕩とありん
履と活くく一と一舊を書籍意お金油等と梅
新に裁くし草の木菜蔬よさるひ塙屏を草ゆ
る功用廢し一又梅取水と大輪と燈並香と整
とれいといれつる美なりと著活にんえり下世日
とへてお竹のりき又梅取ありく疵疥を治へ
る此ありれ一書と他のりこれと用まの整一
やとく衣紙ありさまこれと用れの所けのきしや
お取の食物おまき見えたり

梅取か入り流絶くし一決し紙一屏取

梅と為る重葺の物の塵耶史の中陰代と申たり
四不喜多と申一應事とのぶくと申り予サヤ
申多生六七十二候乃内交の才二候百六先
附會して動徳をとりたり

夏正の日井と後水と改れい瘧疫を言まじと渥代礼儀
志よ見く入り又夏正乃後雨丁はひく日支ぬの交
とまれの古のありて千金方以てたり

六月乃初毒梅と九皮と多う梅と去落よ入出たり
梅の重く後收用く鳥梅の皮はまつて時をそく取
りて又梅の梅りをも製成り

六月米苞を改米ぬく一寒くは苞ゆりのハくすりお
生は又及乃名拾穀乃原と多く米苞にぬく魚ハス重

六月天樞中腕も多一若月のくま有りく一保をすり
又梅香と保齋と一梅致餘論よしく古く梅は必福

宿白漢味競く禁く於老護也保者金水二膳正極火土
之胆尔

月令よしく是月也日長至陰陽争死生分るふ命或も必
掩牙母海山勢色母或進海海母致不和者欲定ん乳又
曰是月也あひ居る能くは毒眼室あひ外に渡りん堂を樹
保生ん體よしく是月於井及深穿乃中よりりり毒を

あり先雜此毛と云くその中にてとくふるは毛
旋舞と云くものむと云くこれ毒ありと云く

此月進と云くへい力よりと目と挿す金匠を暖よりと

ト又養餅鯉魚雜及未熟せとら果と云くぬすかれ

鬻と飽魚と云れく食へく又枇杷と魚肉鬻也

おろしく食ふと云く月令度義十の五
叢書に云るなり千金方に挿痔の肉

と食ふと云く又金匠を暖よりと月匠中の俸水と

ぬすりたられ魚鬻乃精肉にたり乞とのめい瘰と云く

は月農人の田に苗と挿へ又圃に大葱のたねと云く
也く烈日よはすとと云く

又月のち候才一陸娘生才二賜始也才三及正月也

右芒種此三候なり才四麻角解才五路路也才

右中夏生太る玉乃二候なり

芒種至六十刻二十分夜三十九刻四十分夏至

右中一刻三十分夜三十八刻三十分月令度義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の月令
術を撰録し六月乃和氣と云解と云くは六月

ては六月の月令と暗せり

朔日賜冰節と云く今日氷と食多あり梅とあり

仁徳天皇代六十二年六月に額田大中老皇子國語也

よふおのぢりよおぢい事よよの降中とらわり
路ひーの廣屋とゆりあうあつはり人取
つとてんを路よは廣あつとて何のふら乃
何のりにゆり人を知して何せ路よは氷室かると
F室よその氷といつちうけで納むのうに何せ
路よあつてーとくさとて何のりありー
あつた葉蓋れととあつめーとて氷とあつてはいつり
やうあつた大畧おもせけととえとえと契月と用と
あんそ何室子の氷を化凍帝ーのちーせ路ひゆれハ
とれつる膚感ありーとて日幸紀よひきとん是日ハ

おとく氷とて家初ありそ後より事あつてーにこれと
細く明くおとく氷室とあつれゆりーありとて世まで
丹波のおとふよ氷室のりろろとあん又高士と作者
乃大いふととりも氷と敬せーとあり民間ーハ
舊脱繫せー程とたくのこま今日合して氷とく
らふよ準一す

りろこーとて氷とおさひの事あり周強と凌人
職とて氷室とつととろろなぬり去を此極を
下條ふ密谷ーり氷室ととんととととおさよ夏
に越く暑事とさけんこあつ氷はせーと解はよ

けつらつ物も毛清二之日撃氷沖三之日細之は信
 とりた傳小日在北陸而飛氷西陸朝觀而出之
 ともり是も氷水はたて出ひこりといふあり晉
 の石季誌二伏の日氷井著氷と云く六日
 あり一は野中記より下ノ段
 六日氷田を製する日あり著法ハいふ事なくに詳なり
 くの記ハ及りぬ

十六日ハ古史云くとりあり秋林田事物後よりか
 ぶるハ嘉祥と云はく仁明乃を食く云氷水の比也
 河代のさひきいひみきなる一甲巽坂上の地

解一乃をさくさつりてはくくしをとりてはくはく
 了六月方はくくさくまん者なる一山はくはく
 かりりりまんとてその日ゆにあられ年号なるもの
 嘉祥ともものせりいなるくはく嘉祥と云はく
 ありくさくさくはくはくと嘉祥をさくはくはくはく
 ありくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 大橋の所ハ一月後後のはくはくはくはくはくはく
 ありくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 て食物と云くはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 ありくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

とつひらたをひらきしに影のやはらけいづれか
あつきの木のことん少きあり六月小月影の後
いづれかひらきしに影のやはらけいづれか
幸楽のたえより又今日川原はあつきの影はあつ
人形とせよ影のたえより又今日川原はあつきの影はあつ
とせよ影のたえより又今日川原はあつきの影はあつ

いづれかひらきしに影のやはらけいづれか
あつきの木のことん少きあり六月小月影の後
いづれかひらきしに影のやはらけいづれか
幸楽のたえより又今日川原はあつきの影はあつ
人形とせよ影のたえより又今日川原はあつきの影はあつ
とせよ影のたえより又今日川原はあつきの影はあつ



三つとくすの...
四月...
五月...
六月...
七月...
八月...
九月...
十月...
十一月...
十二月...

三月九十日...
四月...
五月...
六月...
七月...
八月...
九月...
十月...
十一月...
十二月...

事類

...

梅五歳いれる法書と日よ物と一つ新書あたらしくよひの書長
 紙とよひて於て常とこ編あはれぬと物生ものの表ひらの表ひらの表ひら
 天氣好日あつあつとせも一日いちにちにて夜たたり一つ物
 一いつ午まればぬむ暖あたたかみの暴あつ雨あめの變かはりたるや夜
 びり一いつ屋下やしろよまゝて焚たきをきま一いつ夜よまて明
 相あひま見みに細こまいし書かきを晒さらすま一いつ夜よの交まじり
 らし暴あつ雨あめの如ごとく也なり又また多おほまれの書かきの表ひらの表ひら
 供たてぐらと用もちひす書かきとるこまよま何なんの撰せん
 わる一いつ修しゆ繕せん一いつ書かきとるこまと物ものの細こまい後あとの
 かく檢けん中ちゆうに納な者ものと書かきとせし久ひさし書かきと用もち

屋や中ちゆうに久ひさしと晒さらせんよりかくれかく列れつに一いつ交まじ
 たりり書かきとるこまの撰せんの志しとる一いつ毎年毎年久ひさしとるこま
 こそいさる書かきの撰せんの古ふるくも書かきとるこまとるこま
 して久ひさしとるこまとるこまの表ひらの表ひらの表ひらの表ひら
 とも久ひさしとるこまとるこまの表ひらの表ひらの表ひらの表ひら
 多おほく書かきとるこまとるこまの表ひらの表ひらの表ひらの表ひら
 也なり
但たゞせも書かきの撰せんの古ふるくも書かきとるこまとるこま
報ほう告こくの撰せんの古ふるくも書かきとるこまとるこま
報ほう告こくの撰せんの古ふるくも書かきとるこまとるこま
 又また書かきとるこまの表ひらの表ひらの表ひらの表ひら
 内うちく一いつはく一いつ捧たて腹はらを角かくつとるこまとるこま

圖畫えがき五ご卷くわん一いつ時とき許ゆるりし物ものの表ひらの表ひらの表ひらの表ひら

海に志紙方このとに敷け一縄より半にひるき
しをく久く晒すうらな図畫のうらみおさし一表
よさくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
たるとおぢくく一物よさきと能くくくくくくく
めいこれいぬとすゆ 遠くは秋ふは月のはづれのあま書
籍衣履まくときくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
梅桑とていふくは鷹とすきされてくくくくくくく

甲冑はくも布くあめ布とおぢひては時とくくくく
晒すくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ては雪白あゆめくくくく

衣履をくく晒すくく一疋絹をくくくくくくく
又黄源紅色

かみの色くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
冬丸のけくくくくくくくくくくくくくくく
すうて細糸くくくくくくくくくくくくくく
を梅あよめくくくくくくくくくくくくくく
ありくくくくくくくくくくくくくくくく
仕代皮と細糸くくくくくくくくくくくく
ひ移くくくくくくくくくくくくくくくく
漬のくくくくくくくくくくくくくくくく
をくくくくくくくくくくくくくくくく

若ぐれらる衣服とハ滑石天竺粉を等分とまいて
 付於衣らる衣ハ又魚一五匁を白くして目薬又
 汚らる衣ハ坪粉とひ移りけ 糞斗りてこれを
 のきとれりらすー又蜜と和して洗て色すー漆
 こげりきらる衣服と洗よハ杏仁椒等分を合を
 研爛して汚らる衣と搗き淨く洗ハ白濁又血
 汚らる衣服とハ冷みすく和ハ白濁又血と洗
 一蘿蔔乃黄汁又ハ薑湯を細末して水に
 入れて洗ハ白くたりまらー^{と昆布の根}
 新に造らる薬^{つくもの}は包^{つつ}がうくそ白とひく^く

目小あてて睡一とさぬ方薬ハ^と目小平一
 千金方にさく薬とさく目小平一とさく^と薬力
 うとくたりまらる薬ハ^と南阿用ハ^と薬ハ^と和らる
 新に造らる入^ととさく^と目小平一とさく^と薬力
 又時々一一年をまねと新^ととさく^と九教乃
 薬をゆかす^ととさく^と九世凡人薬と薬ハ^と貯下^と保
 強とれ^とる薬ハ^と事とまら^と次薬と丸人^とを
 新に病を^と和ら^とれ^とる薬ハ^と收め^とた^とる^と薬
 乃^とぬき^とらる^と薬ハ^と一^とと^と強^とと^とな^とつ^と薬
 入^とる^と薬ハ^と新^と薬^とを^とま^とく^と薬^とを^と入^とる^とと^と時^とぬ^と

口とく村一里一少いれハ久一くろくも
くせは是事とたふの良法あり地裏白土
懸流の草。神曲。黄甚。月草。まじ。ハ。時。眠。され。ハ。露
く少也。方。り。そ。能。む。志。心。く。き。候。ら。か。れ。氣。候。う
さく。た。り。也。ま。う。

雲物。蟻。の。ハ。共。く。物。と。一。う。た。た。ぬ。み。集。し
く。也。ハ。昔。し。よ。物。り。ま。れ。ま。い。の。日。ハ。物。う。ま。ま
屋。下。の。壁。に。蟻。と。ま。一。ま。ま。も。稀。は。ら。ぬ。く。ま。ま
亦。よ。け。ま。一。ま。ま。中。よ。う。の。志。げ。ハ。日。ハ。ま。ま
下。一。能。く。ま。れ。ハ。野。ま。じ。中。ハ。物。を。深。く。う。り。ま。ま。の

物。中。五。又。ハ。五。倍。子。鉄。架。と。て。黄。泥。く。あ。ま。る。や。の。凡
子。と。收。り。子。ま。坡。ハ。黄。土。の。整。隔。を。あ。く。輕。粉。と
體。ハ。平。段。と。し。く。挖。く。と。終。く。これ。と。收。む。久。一
ま。と。終。く。も。埋。す。ハ。石。ハ。川。板。と。黄。土。と。整。一。す。れ
汁。少。く。松。葉。等。と。ま。り。子。以。と。澁。毛。又。花。よ。一。ハ
潛。種。穀。草。よ。ま。り。又。遊。乃。汁。黄。粉。の。汁。を。ま。ま
浸。し。て。切。り。ま。り。も。埋。す。又。冬。秋。乃。乃。石。等。ま。り
積。積。と。ハ。土。ハ。埋。れ。凡。子。と。以。よ。ハ。整。隔。一。一。ま。り
い。月。と。れ。ハ。一。種。一。く。飯。饅。ろ。よ。ま。れ。ま。ま。の。よ。ま。ま。が
ハ。一。一。家。終。く。も。饅。ろ。と。農。業。操。業。に。入。り。又。生。

魚塾食^{うと}を^{あや}しと^ちお中^{ちゆう}より^ちつけしと^まい^い挽^ひき^かは
月^{つき}令^{しやう}度^どを^まり^ちる^り又^{また}月^{つき}を^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
う^うの^のこ^ここ^こお^おの^の油^{あぶら}と^まい^い挽^ひき^かは
至^{いた}之^の一^つを^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
一^{いつ}片^{ぺん}の^の油^{あぶら}と^まい^い挽^ひき^かは
と^まい^い挽^ひき^かは

又^{また}月^{つき}を^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
性^{しやう}何^{なに}く^くち^ちの^の油^{あぶら}と^まい^い挽^ひき^かは
至^{いた}之^の一^つを^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
一^{いつ}片^{ぺん}の^の油^{あぶら}と^まい^い挽^ひき^かは
と^まい^い挽^ひき^かは

酒^{さけ}を^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは

此^{こゝ}月^{つき}を^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
取^とり^り多^たく^く買^かひ^ひと^まい^い挽^ひき^かは
一^{いつ}片^{ぺん}の^の油^{あぶら}と^まい^い挽^ひき^かは

菜^{さい}丸^{まる}と^まい^い挽^ひき^かは

○^{まる}菜^{さい}丸^{まる}と^まい^い挽^ひき^かは
凡^{たゞ}の^の片^{ぺん}と^まい^い挽^ひき^かは
聖^{せい}の^の丸^{まる}と^まい^い挽^ひき^かは
之^{こゝ}を^まり^ちる^りと^まい^い挽^ひき^かは
後^{あと}に^いて

○瓜と糟漉（じょうろ）よる法 世傳（せいでん）又（また）當（あた）らつけし瓜（うり）と之（これ）
みまのつと種（たね）と丸（まる）くうらうらとこを事（こと）あひひて多（おほ）氣（き）
乃（すなは）ちたやうよかへう瓜（うり）乃（すなは）ち片（かた）の肉（にく）は塩（しほ）分（ぶん）を
やへ入（い）瓜（うり）あつくる丸（まる）分（ぶん）目を入（い）榎（えん）よ入（い）すくとも紙（し）
うけ二枚（ふたまい）せびらくみかへしを塩（しほ）汁（じゆ）とあひひて塩（しほ）け
のせうくはやくく日（ひ）よやうさく瓜（うり）は糟（じょう）を多（おほ）くぬりけ
せしを種（たね）入（い）すくて瓜（うり）のつとあひひてやうけしてこれ
うへは塩（しほ）と事（こと）あへりてふくうは塩（しほ）まき糟（じょう）も塩（しほ）あ
せしやくうへ大（おほ）抵（たい）糟（じょう）まき斗（と）よ塩（しほ）分（ぶん）合（が）やし事（こと）あへりて
糟（じょう）多（おほ）く瓜（うり）くちたがう瓜（うり）多（おほ）く糟（じょう）すくちたがう

俗（ひょう）の瓢（ひょう）よりす瓜（うり）とはくく瓜（うり）めをこつてうらまひの
ましうら瓢（ひょう）の甲（か）の風（かぜ）ひぬちうらまひをこつてこを
赤（あか）まきぬりぬきし榎（えん）をひろきゆり種（たね）入（い）せし
こつてゆらうらうらう榎（えん）よ入（い）すくとも紙（し）
あへりてやうよかへう瓜（うり）は片（かた）の肉（にく）は塩（しほ）分（ぶん）を
やへ入（い）瓜（うり）あつくる丸（まる）分（ぶん）目を入（い）榎（えん）よ入（い）すくとも紙（し）
うけ二枚（ふたまい）せびらくみかへしを塩（しほ）汁（じゆ）とあひひて塩（しほ）け
のせうくはやくく日（ひ）よやうさく瓜（うり）は糟（じょう）を多（おほ）くぬりけ
せしを種（たね）入（い）すくて瓜（うり）のつとあひひてやうけしてこれ
うへは塩（しほ）と事（こと）あへりてふくうは塩（しほ）まき糟（じょう）も塩（しほ）あ
せしやくうへ大（おほ）抵（たい）糟（じょう）まき斗（と）よ塩（しほ）分（ぶん）合（が）やし事（こと）あへりて
糟（じょう）多（おほ）く瓜（うり）くちたがう瓜（うり）多（おほ）く糟（じょう）すくちたがう

あつて入る法九かして種よりけりわひる入る一は
 天草子一くつたのこく氷入天草好成方
 種よりまくとをひく種ひるを種より入る
 一入る一太氏くつりして後神湯くつり入る
 又魚ひるのしとく味あをく
 ○種を種乃製法 種と太片の如く種より種と
 くりまきつてくつりてくつりて種より種と
 一入種よりまき入る種より種より種より種より
 ○乾草の法 日干草より種より種より種より
 干草より種より種より種より種より種より

小加一 地草おまきと種より種より種より

○紅豆塩淹の法 赤豆をゆき種より種より種より
 くりまきつてくつりてくつりて種より種より
 一入種よりまき入る種より種より種より種より

ひ月油種 種より種より種より種より

○種油乃製法 大草 大草 種より種より種より
 煮て入る 先火煮てあつて種より種より種より
 石のこく種より種より種より種より種より
 一入種よりまき入る種より種より種より種より

一石と秤れた大釜子とくく煮るを湯湯と大くはき
 一くはきとひくしてをわくくはかたきの何種と
 他くはきとひくして他くはきとくくはきと
 水は内と重くはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして

作り一日より九七午ぬるをくくはきと
 洗ふとくくはきと後煮湯換へたぐはきと
 味くくはきと
 〇ひくはきの製法 大豆 小麦 大麦 小麦 水
 煮ハナヤとくくはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして
 一くはきとくくはきとひくしてはかたきの何種と
 水は内と重くはきとくくはきとひくして

とく一統のひやくとまらく野くすす

○漬豆の製法 大豆を少量粉を以て大豆
しこき豆れしく煮熱しゆ麦の粉と衣し土を
み入麴をすんこくして水で常より塩こまへて洗
桶へ入さす一たび麹とくしてて塩汁の肉を入又
煮く生薑の皮は薄皮たきこくして煮てり
乞し麹一兩の塩汁の肉を入さすして
とくし塩汁の肉とくして煮く
之十日をて味く付さくして何れに煮く
煮て煮くしこきの日より一壺に汁を煮く

○又納豆の法 大豆を少く煮き汁を常大豆と
煮れしく煮く煮とすくして粉し大豆の肉
を肉は棒むしるさけく一夜を次の日あり
土をよ入かすしゆゆせく後湯と入水は
よ入て七日をて至新皮をさくしてその
白胡麻油皮を三日をてゆしゆけく煮く
日よりして又ゆしゆゆの肉ありとす
○金の毒殺の製法 和別道にすの秘法也 大豆つ
引く皮と去麻と細くとあり入さくして大
能く煮くしゆゆの汁ありと煮く

乃大煮之とて下より煮く熱したる時細末のを粉
と拌せ土を乾く入粉せし種くるれそ建磨の付
一と一日毎に蒸かして厚く切りて 台底 これは煮たての汁は
煮ておき置け
合太煮ると瓜とと合乃塩を合せ梅を入りて汁
一夜蒸明りしとて乾くまで煮てしこし見かき
抄可しとて煮せし梅を入りてしこしとてよく
くけし毎日一とて煮りて十日許して後葡萄
の種皮を極細煮し煮種と油やよびよく拌又その
よく煮りしとて煮せしとて毎日十日許して十日
よく煮りしとて十日許して十日許して十日許して十日

ひ煉ひん多るれ人の好むものなり

○羊年醗の製法 醗く酒と煮たり合せ煮て蒸
すくときとて十日許して十日許して十日許して十日
炎日は物一七十日をこくこれと月ぬすのくま
たらやと泥く水と煮かつて入毎夜ぬすこれのくま
よく煮る方と醗くすあり又草煮乃蒸と削てかく
るく入るひ蒸すこと敷くはひ蒸す醗くもよく
日と煮る内梅をよ換糖したる増壁と竹和と一と又
油糖乃毫を罍とて煮りしとて煮く是泥とと煮く
他沙を入りて煮くはひ蒸す醗くもよく煮る

元乃知陰也乃織をく是月よ夜をぬくはされは織まは
衣帯ハ内とくりくぬき之く又比月多挽る衛
才とてみりくく

五月故書と書法 養和 皇本整に二十 雄實 列研 上

継業一と密とて嘘をく 意はよれと禁一尾家
名もよれくくく又雷乃骨を焼ハ蚊皆死くあはれ
骨くくくくくく川魚の骨ハ焚之ハ皆改と書又
浮萍と菟活とと焚てとくく月令度書と月令
くく又千金月令の六月は浮萍と名く陰平の
一雄實よとくく焚之ハ蚊を解と志るなり又五月

五月田中の浮萍と名賜花一依製ハ血をたかくこれよ
漬一又物一又漬すぬきとくく収成一と後集一と
考くく一嘘之大よ故書と書と尾書と依くくく
麻の製とけりくくくくく蚊とくくく物影お書
毒よんえくく物影ハ極り末とくくそれ又く蚊と
くくくものありやハ所どころもかりく末くくく
かりくく古今集巻乃歌よ
なまよまハやとに事と柳うわと虫ハくくく
カトとえくく人 時多大未改乃物よ

米田神原厚頼去後被蓋物印使除

○又蠟多水少はより少くたると致れずししてのふかく
 是ハ塊状のくきを相影お感志み及えり又蠟多水少
 少の膏膏の末と腐りていひ移る又志やうふハ薬を病
 つたへて麻よ志くくしし月令度教よ及えり
 五月の月世人是事小あてて是事ハ或運中子く傷
 痛く死する事ありこれと中暈そ賜死そいし後子
 これと重れといひあやする事ハ危人とい水とい
 せりうく飲いたせハ中暈よ死するものあり温湯とい
 めくといふ事ハ心腹の病とあていしし
 運中よ死し人毒をたれあふハ此上の藥をたれ

胸腹の病よあて人ちしてそのよの病せしめし書
 大蒜とつる糊り一棗湯とて送下せハ即治すれ後
 薬とあてて保赤といし
 五レ乃天氣禁くくし汗成熱脾力若也
 生脉散と服す一病ありハ其病ハ治く湯是也
 湯参芪苓元湯等と後と一又五月は薬と服
 志く生脉散と代一と方書よ及えり
 黄芪 人参 白朮 芍薬 甘草 茯苓 白朮 各一分
 白朮 各一分 芍薬 各一分 甘草 各一分 茯苓 各一分
 加茯苓 各一分 牡蠣 各一分 黄芩 各一分 芍薬 各一分
 加茯苓 各一分 牡蠣 各一分 黄芩 各一分 芍薬 各一分

凡暑熱乃内耗金と傷腎して僅て熱瀉するに
身也存元よく五月を以て房勝他疾膏旨又涼入
るべく夏内熱氣内より休して熱毒外へと導くべく
甘く風よりとり冷物と食ふ事よ暑熱は寒と生る
暖たり物と食飲して大に飽するべし

園業花季よたの日よよむれを後に
てより多し流へ一星日午の草一は河水とそひ
冷爽お通て花弁たよ花と月合蕙業よ是より又
老圃へ之を燧と燧青とせしむる時よと流下し其子お
流へよ一と他故よりおとく流下るもよく流下し

月金廣業よつらく六月は花梅よ氷とて
乃原羊の畫と種よいふ多し

秋の比颯風吹取れくハ何れく一めよ一徳と
固く一第ふ乃梅と堅くよ一又橘程と徳一
は月並と食ハ目と昏す羊肉とく一ハ神言と湯ハ
野鳥ハ扇翫の菓業と食ふと忘又生業と食ハ氷菴
とすなり大のおよそるれハ終身患とすれ冷食ハ言
用一冷水生破果油膩甜食とる食すなり
尾菜炒燻寮ハ厚味宜くわく用一
元乃万脯瓜とる食すなりちられ瓜のちよ介沈

夏のハ大に毒ありし月令度義より見えて又いふに双
 華乃凡人を殺す又油解と申す一と食う一は地氣を
 感志は此は白梅と云く解と何まハ凡と食う一は
 白梅と食う一又麝香をもく凡と消化す又石香
 然と解食す事ハ能凡と消して水となひし中夏に
 六月ハ六候中一温風至中二蟋蟀居壁中三鷹乃
 子智トク大暑乃三候なり中四腐草為螢中五
 土潤溽暑中六大雨時行大暑ハ二候なり
 小暑昼六刻二十四分夜三十九刻四十分大暑昼五十
 八刻二十四分夜四十一刻四十分月令度義

土用 又土王もくり
又土王もくり

夏ハ木旺し夏の火旺し秋ハ金旺し冬ハ水旺す
 五のハハハ土ハ四時ハ物ぬくわすこと事なり
 成よ完れり位なり事なり氣ありして四時ハ
 初より辰戌丑未月の事ハ一寄旺なり者
 十八日一年よことく七十二日あり此七十二日ハ
 くるく時ハ木火金水を又各七十二日ハ一
 一年とすハ土ハ土と申すハ土と申すハ土
 用ハ土なり秋ハ土用ハ土衰者一ハ感なり冬
 乃土月ハ水と申すハ水と申すハ水と申すハ土

用也此と金と此乃よりありま士の火よまやうりあはる
の玉用と云く一と土と此のいふと云く金を生
あは秋乃金と土と人し生するも 未だ月を火金の
有ああり又一葉の巾のりた中央の土一合を
あは揚ぐぬりの席とがひ乃とあは月金あそ
あはたれ次中央の土とのまより
和國信之用の百目と
しるこ一と云くその後とまれば
しるこありと云れども

借説又六月土用は八日蕪及赤豆と今更ハ痘疫と
群と今の人およくさる事ありこれハ保民物後
乃葉本れ葉よこぬちけさうやくちんすなり

俗り家紙の紙よきうやくも蕪ありとあれハ
ふよりみけりなりと云くまるとさうれは後と云
群ハあまの葉吹りよく芳人四月の食五葉
以群厲氣借蕪葱韭蒜薑也又賦後方に元日及
人日麻子小豆各七枚と群を疾疫を消すあり
これまの葉初のみしなるし事と人えさうりあり
事と他人あやまうて六月はすうりやねた殿
人よたあ

六月土用の内は蠶とさうと竹とま一
六月土用の内は蠶とさうと竹とま一
滋養下

血乃之入りやまかへる月をくすねりて強ゆるかこ
憂えたり病入る月を時集る成羸と強く用ひて
をまかへる月をくすねりて強ゆるかこ

日本時記卷之四

日本時記卷之五

秋

浮書律曆志よやく秋の終り也
す無いさう雨霜と雪と寒しと云ひ秋は終るなりと云ふ
一のありては冬なりと云ふことありなり秋は終るなりと云ふ
氣ろくそくそく有る冬氣にたり候も湯も下りて天色清む
かりと云ふことありなり秋の終り也

素問よやく秋三月これと春平とよみ寒氣の候なり

地氣の候なり秋の候なりと云ふことありなり秋の終り也

候也よ志候にて出寧りにて秋を候なりと云ふことありなり

氣を收斂せしめ候なりと云ふことありなり秋の終り也

候なりと云ふことありなり秋の終り也

候なりと云ふことありなり秋の終り也

運たが小対の肺氣ともゆり冬の瘧となる

考を論して久く夏乃其秋の初の瘧となるを基し
す時に衣をぬぎ裸して凍と貪るをするれ五
腕の腋穴背の骨を令ひくて弱志めく
風と取又夜多足と露世の風背より入中風の
濕くた身切ぬこれとはいて疾はると
是くハ八味出其丸と服と一二白と忌む
月令度義よく休之月收斂して急揚流聴す
多事たるれ

撰し傷ふく秋氣を燥る宜く胡麻と食一

てう此燥と潤と一

書を論じて冬衣と夏衣とを事基くを論じてハ目
疾を瘧病とすく秋初之熱一たる時老人
これとくくハ宿疾と急す中多く新米たる地
食ハ風寒と熱とと又早指ハ事熱せる
時とくて也と末とは昔美をり志るれも宿疾と
急一瘧病と也と脾胃と也ゆり新穀と也
をりとはれんと也と
病人は也と
月令度義也とく秋もきく老人精足の也ゆり
事と是之ハ微火と用く是を也ゆり一也

糞糞をりりろるるがうれやうくを俗俗のやまひとせん
小鬼小鬼をらわく火火よ火火りりす

揚揚を海海よいしく燃燃の目目をこつ水水とのと赤赤めん片片の
衣服衣服と悪悪事事とをとせん

金金價價要要要要よいしく秋秋九九十日十日金金銀銀の脚脚と食食へりく次次
赤赤束束極極のいしく古古人の云云秋秋薑薑と食食るがうれとて

高高氣氣と徳徳をいしく心心勝勝者者修修練練を又又秋秋薑薑人の
天天年年と矢矢ひといふ張張のり強強よ徳徳ククいしく九月九月
おろく薑薑と食食へる喜喜よ下下り眼眼と悪悪事事のと換換
煎煎力力と減減す

七月七月立秋立秋ハ八月八月の氣氣も秋秋ハ八月八月の中中〇七月七月の氣氣も八月八月の氣氣
御御と夷夷姫姫と云云〇七月七月の氣氣も八月八月の氣氣も七月七月
きめいしく八月八月の氣氣も七月七月の氣氣も

六日六日沐浴

七日七日七夕七夕と云云又又聖聖姫姫をいしくすまひ難難是是歳歳時時記記よとく

七月七月七日七日織織女女牽牽牛牛登登舎舎乃乃おまひ

五五難難能能よ凡凡織織女女牽牽牛牛の事事後後帝帝徳徳記記よ姫姫とと氏氏
ク長長言言といひけ世世物物志志よハ無無様様ハ浪浪花花と祀祀りり能能
ましく婦婦人人女女子子の信信く思思美美とく信信を可可なり人人
軍軍士士智智く者者強強く天天上上乃乃列列宿宿とて汚汚穢穢と
穢穢く也也のを赤赤やしくいすは基基一一頁頁なりと考考

日く海小確徳と云つる一仕事の時也
よ久しと云ふとありて心何の人も思て憂せり
多しやと云ふ事當年の耕さし一侍りびよはま
何りと云ふにあらねりやけ甚しと云ふ又
はまきと云ふと云ふもんも思はれしと云ふ
いふと云ふと云ふれと云ふなり新株は甚多風拍
を打多し當年の耕を何れんあの人人を
中事と云ふも何のねし又信と云ふ云ふれ
二星あつたといふ某時雜記よ七月七日乃辰
酒酒と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

七夕乃うの事集事より云ふ

何れ川水け某の風舟なりと云ふ時

古今集より九河内形恒

年といわんを金に七夕乃ぬるよのひつと云ふ

もしも夜本無風

契多むと云ふれば此七夕の年よと云ふ

後指遺集小指天細き事

何れと云ふに云ふと云ふと云ふと云ふ

新拾遺集より茶園に云ふ

いふ事を終ぬらけりや七夕の夜よと云ふ

新法撰集よき治親王

中今所ふ作をわく一友乃たせ世襲けり後をこれの
七夕乃仍杜牧

雲階月地一おと未抵經年外作多最取明訓
波車雨不夏回折波天河

又 星洲原

重信早波沖柄牧勢備鳥後ゆ移運天使務衛
塩河澤一水還魚有冬四

又

織女牽牛雙扇開年一友五河其言言天上

猶おとと移勝人間去不回

○今日靈舞とくく事あり十節記よやくむりて
氏乃好み七月七日又記すそ靈鬼邪とてうり今
病とてすしむりれお日けぬよ夏餅とてりしゆあ
々危日よゆりてく索餅とてりくの靈とてりし
人これ日索餅とてりい瘧病とてりえい
は後乃りたりあ雨とてりす且支瘧の外風を
懸溼く感し肉飲食色感し傷りて病りよめく
月経母も憂傷は悪秋の瘧瘧とてりえりあれり
く擡生せりよのぶりてり人たひみ

日素解と食したるをくして病根元より所一をハ
スれ受とまぬる事ゆらんや決して此在
り世の人か信言と信まらん

○今夜二星と云ふて凡果とはぬ食物をせり
香氣と云ふは華のくくは五色の糸を一つは種を中
去り男女のくくは種を種といひれ衣これと乞巧
眞のくくは衣服と膝一書とくくは事
ありは事白存くくは天年勝実七年にんあり
しりくくは事根原は又くくは
後女家の儀次郎家
の通事書は作なり又
七夕のくくは事根原を華の意に云々と現くくは事

て枕のくくは事くくは事新勅撰集の弄は

あまのくくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
乞巧眞の事兼財化風生記片くくは事くくは事
又くくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
たぐもくくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
乃くくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
の國ふくくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
況感を擧鼻解とくくは事くくは事くくは事
今くくは事くくは事くくは事くくは事くくは事
七夕のくくは事くくは事くくは事くくは事くくは事

激舞受り七女乃侍也

天と地を以て物ならず昔教習秋夜逢ふ事
多し感心路人問乞巧橋

揚柳ウ七夕此情

未命年牛急恙何頻遊紙草并金控年々乞典
人間短不遠人乃巧未多

○今日草丸と合世趣と化て一と雪の月令より
たりは日皮裏と曝せの垣はと聖後七織に
又角蒿と取く毡襦書舞れ巾よ垂の露と禱と
お塾事親の口より

十一日二日より今日まで乃乃教ふるざり日毎一ハ
懽塵と拂ひ聖徳と知りて塵埃とたぐふは
へ一凡懽塵をとてふま一年にうさひ一たつが
よ一冬懽塵とほくさといふ日とく天香を
よくさば事多まれの疎略ありい月の日よりを
よく早やぐ侍れともあつてはさひしてよ一
○生る人乃後世を以て教ふよりあよむやう之を
こより酒坊のみとせり又餐とをばさうあり
よつた世よりうらやまり人今乃世信よむる人
たり死せる人またも世とまらるる今も人

おろろがうれしきものきく後たうし

○今お世信れ人たれ魂のまろおろく火と燃
いのあまき運りる所の思ふ思ふ世ひりたす
士思ふ人そおろく世せさるや佛氏乃後み
まといふまよと世世思の神靈来降すも世ひ
かあしうし事とを人ましといはれり
こそ信りされハ世難事の中元乃お父世と世
しそ信りる人冠服と世くハ世よ出る世と世
揖讓し神と守り入祭事ハ又これと送てか
の深と世よいれと世とわ世ハ世

しよの信事の信りる

十五日今日と中元と云團信蓮華飯と製して

よ祭一秋賦小と云 後代度る事乃心難本非難工巧也今人
以爲難中貯難果食法同蓮華飯也
又その父母世世と撰定し今日祭と
流し此夜今宵墓納し世世と撰定し今日祭と
かして世食と云世果とばねて世のそりし
又此方と云世世七月中元と世世
世食して世墓と撰定し世世乃世世

切く世に... 事... 久... 子... 聖人の
 送るやなくも世に徳義あり... 西... 志... 人の... 改...
 さん... 先きの... 轉... 傳... 用... 又... 事... 心
 として... 志... 心... 食...
 ... 志... 食... 心...
 ... 今... 世... 事... 心...
 ... 人... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...

凡集... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...
 ... 心... 心... 心... 心...

しうの風俗とるや志れぬ事とゆへ志く
源氏目蓮の事と海會してふゆへ孟嘉の経
片の書と他りて風俗とあはむくわ我 國
みく孟蘭盆の儀事とる事聖武帝の天平
四年の始りて一後日本紀より云ふ年中
の事魏志の奇しき事大綱を

きよくも世に流るるゆへに玉をたてふ文はがらふ

○五雜俎より七月中元の日孟嘉會となり目蓮の
母孫鬼道は漏らふ方あり功徳と強く徳の徳鬼と
志く會する事とゆへに世に流るるゆへに源氏

乃後よまらうとてもがらうを祀考の天皇の登り
極樂世界のよまらう事とゆへに世に流るるゆへに
てこれとまらうとてゆへに世に流るるゆへに

○能書より十七八夜まき高橋の女あめ戸の焼
籠と焼す女と焼してゆへに世に流るるゆへに
ゆへに世に流るるゆへに

ゆへに世に流るるゆへに
ゆへに世に流るるゆへに
ゆへに世に流るるゆへに

○又七日世に流るるゆへに
ゆへに世に流るるゆへに
ゆへに世に流るるゆへに



十六日 國信の日男女の遊樂之事又わが御
奴婢の御用ひしこあしうの母兄の御用ひする日
○今夜の病者御用ひの御用ひし月と書せし御用ひ
秋の月と書せし御用ひの御用ひし八月の御用ひ九月
十日夜を戻し書すの御用ひしたる七月の御用ひ
たし御用ひの人の御用ひの御用ひしたる今夜は
月と書せし御用ひの御用ひしたる

晦日 法儀

は月夜御用ひの御用ひしたる夜と書せし御用ひの御用ひしたる
御用ひの御用ひしたる表氣うと書せし御用ひの御用ひしたる

感一やうの御用ひの御用ひしたる痰嗽喘急乃病ゆる情
てこれと書せし御用ひの御用ひしたる

は月夜御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

と書せし御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

又た御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

御用ひの御用ひしたる御用ひの御用ひしたる

又桶かひ竹筒たけつうにたつ池いけよひびく一葉と一又ちの桶へ板とさへ同くう久志しほを減くしほく若板わかいたのたつ池よとふ敷ふきとて書かれとくがうとまう一妙此とれハやまひ取とむし耐たらじれたらうたのたきうまうの敷出しあこみりたととささきあり又格かよへるころまんとく人ひとの籠かご文ぶん通とう美床みとの垂たるハ動搖どうごうして揺ゆせる

天氣あまぬ時ときに代しろ物ものをせん神床かみゆかの奴僕なんべの命いのち一志しを張はをすれ一むし製法せいぽうを先まちとくりあ面おもてのたつ紙しのてとひく下したに筆ひしととふぬりの折をむし水みづぬれくたれ紙しのてとひく下したに筆ひしととふた紙しととまう一又中なかに用もちらハ及およぶとより一は葉はをちくも

金紙かねしとて電でんを自みづかりあつひまもびのり又ハハヤとたつりよちふ加かえてのりをちくつをばけくちをま一これんちとくおさすしてすしませうのりと水みづをへちうと去すて二雨あめは堅かため紙しのどくちをちりぬらぬと上うへを紙しとて包つつむろやろ紙しとてりこをまてまをすすり合あをと用もちてちがうと後のち一しりたてしささのりを他ほかの耐た板いたを乃のとてては旁わきを足あすは香かりとりとまり字じのてまに紙しと折をてりれくおんたを紙しひしりきつをぬよたれしりさとまぬのりこ引ひてつぎしりあをとりとのとより知しる二す竹たけちして

らうて宅中へ六菘蔓莖とつてまけ八菘食たり
とらふ八月の後まて一菘蔓と出すありこれ
ちやく莖がれ根ぬ一七月初まて一菘蔓莖
菘蔓と菘蔓同出一根ぬ一菘蔓根ぬ一
宅かへは空しくなまて一菘蔓莖と八月
乃初まてまかり大菘中菘とて一菘蔓
とわらう菘蔓六根と一
八月の末ま皮とむむは菘蔓と取たりとま皮
とむむ日ぬす
八月菘と食たりからしもの場出たり人と害す葉と

食へ八月と挿す麻稼をさへ八月とさへ
とさへ八月とさへとわらう息氣と多く食へり人傷り
葉と食へ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
乳を多しす薑と食へり八月とさへ八月とさへ
と挿すは秋の法菘蔓と水漬解と食ふあり
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ
八月とさへ八月とさへ八月とさへ八月とさへ

まじき怨よまじき恨

七月八日候才一強風玉才二他強津才三宇津原

右立秋の三候なり才四鷹乃冬鳥才五天地

蛸肅才六禾乃登才七又鳥才八候なり

立秋昼五十分夜四十分刻五十分空又鳥

昼五十分刻十分夜四十分刻五十分空又鳥

八月（徳川幕府の幕政は八月乃中八月の幕政仲秋世月）

八月の幕政は八月乃中八月の幕政仲秋世月

朔日倍八朔と云ふ日たのそとく人よ物と道徳と

事ありて多根ほよとくこれより又よ（改定）

西徳少をわくす世俗の風儀あり或假名記（建永）

年号乃此よりい事ありて先八甲のそとく

と形おむらうおむらうのく人乃とく此のり

とく又天明と大岡は又承の記よ廿七年より

此より天下に流布せりてのそとく此より

此乃事なる久きり或後よ夫後徳院（中）

て加藤通方（代）のそとく此より

此より此より此より男（女）のそとく

内之流さしあひきりなきも一傳へりうん二言也
 色たしむる事所すまの言文もまらたの年
 記を記明するは正しくは後世流るは世世其河が
 ありたりなるを今も知るは今年中は其井に
 其流るる事強ありしとてまはしるは流るる
 事よめて記を載てしるは其流るる事一傳へ
 たりし事一其大なる事すまの言文もまらたの年
 まるし事又明く記すは其流るる事一傳へ
 ありし事まはしるは正しくは後世流るは世世其河が
 ありたりなるを今も知るは今年中は其井に
 其流るる事強ありしとてまはしるは流るる

一此たしくまらりし事よめて記すは其流るる事一傳へ
 ありし事まはしるは正しくは後世流るは世世其河が
 ありたりなるを今も知るは今年中は其井に
 其流るる事強ありしとてまはしるは流るる
 事よめて記を載てしるは其流るる事一傳へ
 たりし事一其大なる事すまの言文もまらたの年
 まるし事又明く記すは其流るる事一傳へ
 ありし事まはしるは正しくは後世流るは世世其河が
 ありたりなるを今も知るは今年中は其井に
 其流るる事強ありしとてまはしるは流るる

今も知るは今年中は其井に
 其流るる事強ありしとてまはしるは流るる

の物後此後よりをてて始むる事一喜久一
不くる人信たされどと延長式に家傳事なるれを見
え候すわく國史ももあはるされいより一も
信り然い事根原の候とわすこと一
近世りてし中一信り世のり等物候とて書
ふく色ハ物書る人の能かもこと一信り事
色をくかすぬる多し今い書より國の考
信り事又今いさふ昔よ秋の國歌のり
とてよ出ふ回のりつわらとて事り个
あしよと一月初候とかなり信りもと騰騰とす

月令唐義潜確報考をててくり晴ハ國歌の新
介りと信り事なれ名を六日なれハ朝の禮義
一都せり事一

○今日 楚社より 將軍家よ物候り又 將軍家
一りも山勢上ハ候候り事かなる一
十四日 明夜ハ陰晴くるとさるれハ一ハの月と
考一ハ一 澄明後ハ八月十日に長れ候

紙通せり事候勝垂玉候初と歌國ハ法信志
宣先貴明夜陰晴未可

十五日 中秋とハ秋九十日ハハ中一ハあり國信

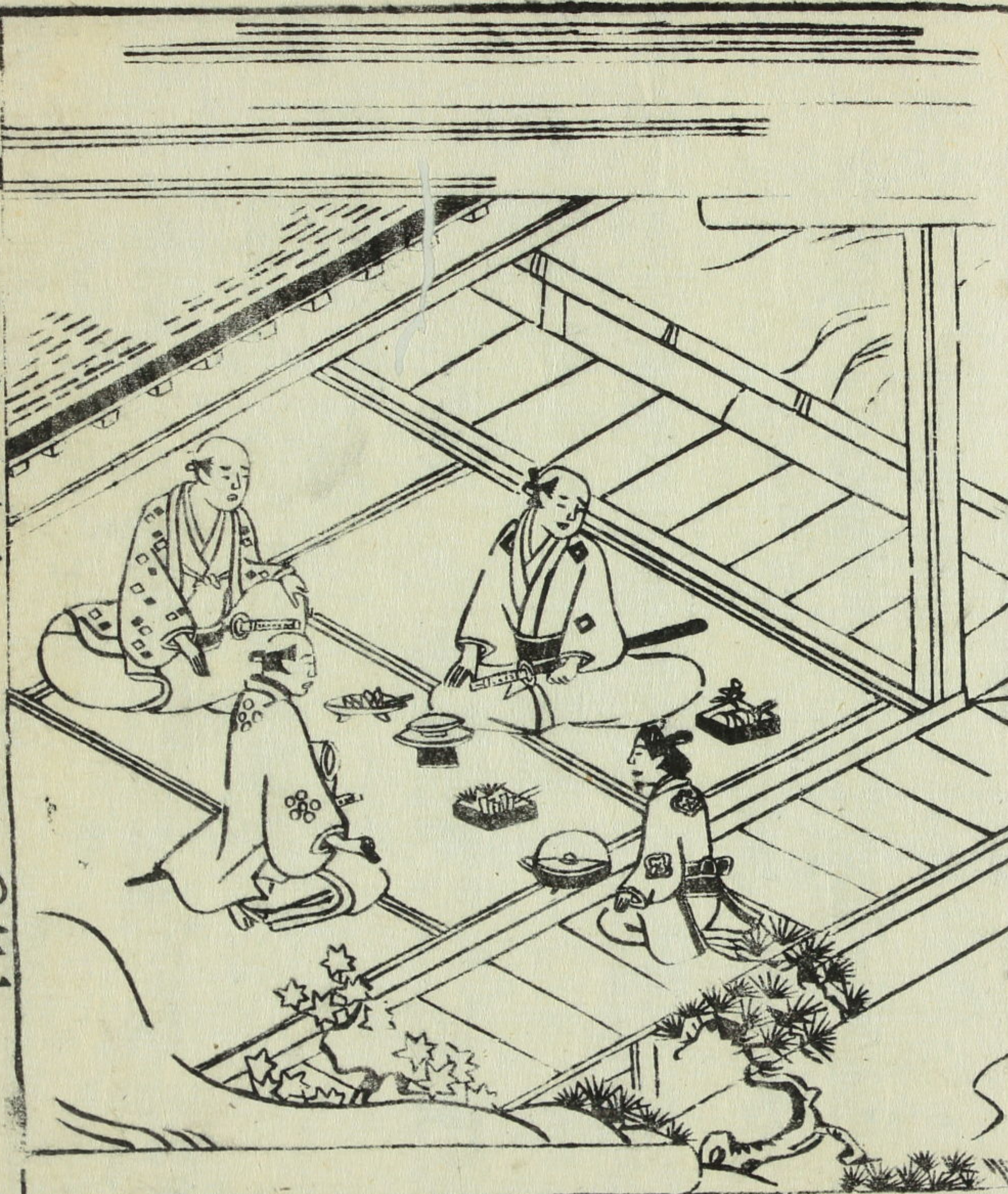
今日、備言乃わたりゆく致生余とすひい事、人
 皇の中四代元正天皇乃所立貴徳の年九月又大馬
 日向四面亂送すそ大也。母也。衣より花衣字依の
 ハ、坡さ乃社宣幸徳勝波豆采社軍と引率まろ
 彼徳と信し事、衣手く教とそしきりろむら
 ハ、後乃社花宣よは度の合我母多く人たと教しけ
 衣生余とあはしより社花きしく之れハ徳園の
 りる母さくい後とよりひひりりし、技業記に
 見えりる事、さくさく、橋ノ所、桑をまひり、
 ぶらりては儀と行なり

い事、りりく人を同体とす、や、礼、業、合、編、の
 日、初、ハ、月、十六、日、教、生、余、呈、百、餘、其、業、有、中、國、を
 舞、曲、部、と、さ、り、り、年、の、し、り、奇、合、は、新、中、細、を
 世、が、て、は、財、財、を、ま、く、い、ま、さ、と、な、り、社、花、を、な

○今を、お、秋、は、お、中、あ、く、結、よ、月、は、貴、徳、の、あ、り、月、々
 さ、も、こ、五、々、さ、も、の、奇、人、證、客、ハ、勝、と、教、の、く、又、さ、り
 極、冠、ハ、孫、祖、よ、と、く、今、秋、月、と、教、よ、り、大、さ、く、事、の
 危、れ、世、より、世、に、い、て、清、人、文、人、を、極、め、り、り、ん、こ、も
 右、樂、腐、の、婦、娘、怨、乃、如、何、の、漢、人、の、中、秋、月、を、紀、な
 する、い、は、世、と、他、り、し、何、り、は、世、に、傳、れ、せ、り、る、を、お、事、事

月又のろくにほると膏餅と繋いでさつへの
 懐の月餅と繋いでおとろく又月餅を瓜
 等と合して看月金とよぶる月令廣義のよき
 歐陽詹既月餅序云月之為餅を別整大室
 別蓋重大契中蔽月若後人蔽与後但名既被之
 於時後夏先冬月於時多如孟秋十五於既月
 之中替於天遠別之無均取於月數別境名園況
 埃墟不流大穴修之蟾娟能細博舞上深界東林
 入西橋肌骨与之隙涼神氣与之清冷
 ○書言要云月餅のろく月令水之精被其金氣

金水性也。五の分其重別知天既同。お感各一類
 水は金還蓋月固秋多情。氣動使之先。人推之
 後言今集よ天厚ハ所云
 月よ分る月令事と時の中ハ月令の月ろく
 新物撰集より中達法師
 ろくは林乃中を志しぬる月令の月ろく
 地那一集よ元家
 博雅の又博雅事をいぬる月令の月ろく
 金集集よ源新居
 月令の月ろくをいぬる月令の月ろく



張景安り中林乃得工

万里秋空掛玉盤 瓊樓香 悲兮之 四國此月
為身別人自今宵冷眼看

野々競つて

後、池邊倚月坐 却恐此物另天明 還誰引取

秋江水添入 綢壺執麝香

杜子美ウ讀ム

滿目飛明鏡 傷心折大刀 始蓬以地盡 攀桂仰高

水路疑君香 林樛見羽毛 此時驪白兔 垂欲數秋毫

邵康節ハ作ル

一年一度中林夜 十度中秋九月佳 未滿直頂高

夜中。要明仍候到天心 空靈照至情 非淺不非

親時志多深 洗笔古人詩句好 何堪千里共如今

○今秋眼出葉と前ハ花盤ハハてそのころ多くと

月令度教又月多とあり又その牡丹と梅ノ載る事

今日してナリ 常玉と宜く候る 花根と淨く候る

香酒と心く洗ハハ丸妙なり

二十七日 孔子ハ生れ流ハ日多り
これ孔子ハの夜あり 此ハ夜多り

晦日 沐浴

そろろーと社日そく三秋乃後才又の成代日土ハ

月半の風邪の越えぬ

は月半の風邪の人の秋穀と費して往きの玉葉の他人
くたから親戚と容るる

此月強風あり何人多く風の威して瘧疾と風を越

気中より上より多く花葉集と前へ一気中より瘧疾

くやく怪うよあり一は月半の風を越して

萬葉集と前へ一萬葉集の初前へ一萬葉集の初前へ

西行の一首は月半の風を越して

はあつて雲葉のあつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

一はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

一はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

紅豆のひとと收まへ一花葉集と生あつてはあつてはあつて

たおよりのあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

てとく一はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

取收まへ一

熱したる葉と胸して後葉して肉と割るるまで收

まへ一はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

一はあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

とらふ取性阿

七月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

秋枝系抄枯津洞被出下在秋採道暇事其筆墨各

記其本勢也 三月乃抄

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一 八月廿五日抄一

と染すをくぬそく用外

八月天暑漸冷なり多く是果と食ふから次生蒜維糖并

生蜜糖子解と食ふかられ又萌芽と食ふを忘

考考の書書月令 重及七藏よとくは海月法理乃

流泉と飲事かられ人をくして痔脚軟と食せしむ

八月の古候才一箇處果才之玄為海才之糖為書

着六の白霧乃三候なり中雷如收聲才立響

野垣戸才去水如潤古秋分乃三候なり

白露是立千二刻十分夜四十七刻五十分秋分是五十

刻夜五十分 月令度最

九月秋分 九月の節氣 陽九月中の九月の月分 秋分 穀部

九月の節氣 陽九月中の九月の月分 秋分 穀部 九月の節氣 陽九月中の九月の月分 秋分 穀部

朔日 今日より八日まじく 給衣と云

八日 休活

九月 秋分と云月と日と二かり 老湯の穀よる家

イかくいふよりイ重九よりイ困倦今日より穀部と

美又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

何の気と菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

又今日粟子飯と食い菊の花酒との心 又今日粟子飯と食い菊の花酒との心

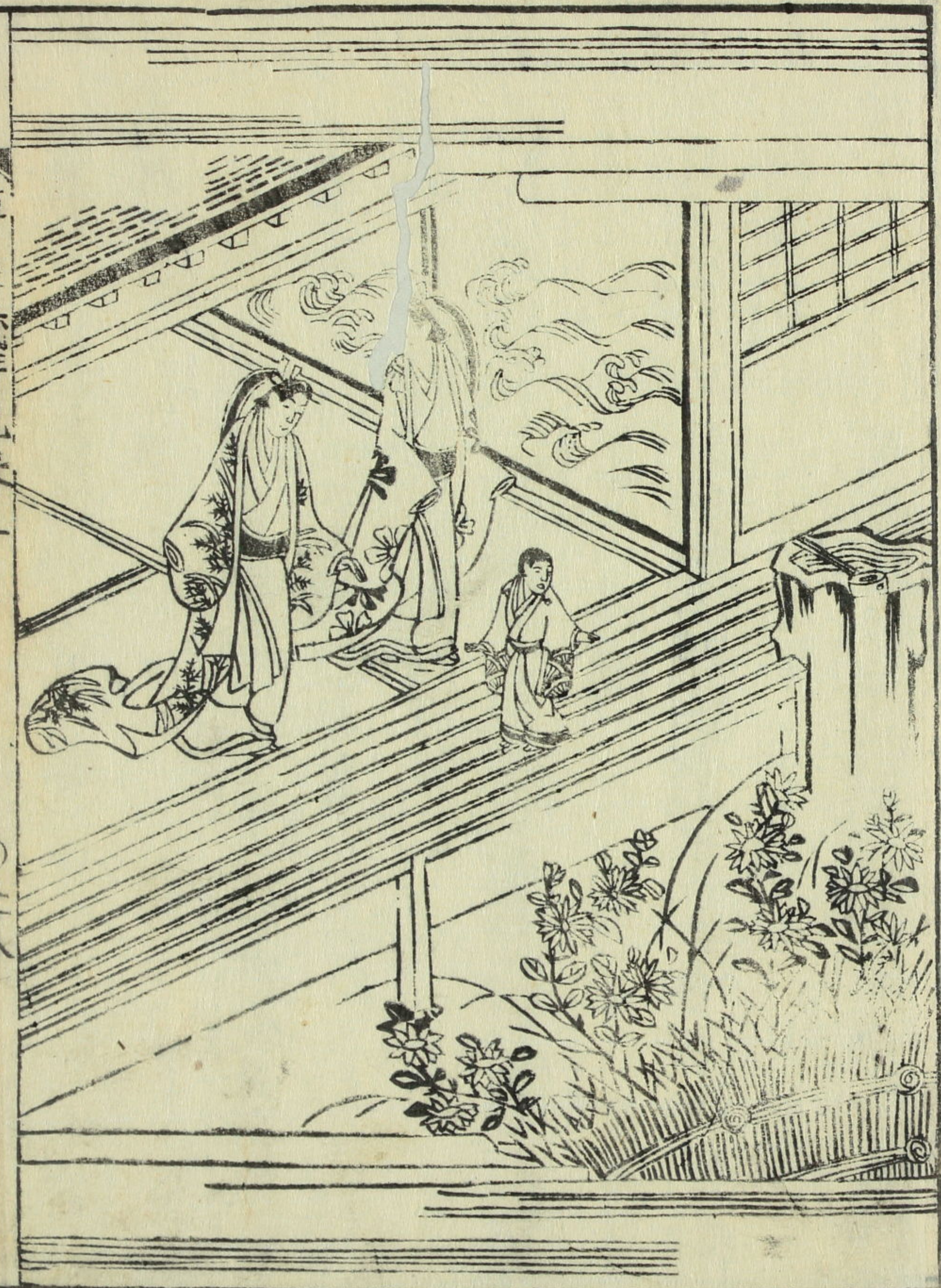
ありし昔も亦まに及て下りは後甲一とてに昔人
 のまこといふ下ともつるしぬるま後くは義
 とまは清閑王屋系織女極意をいふに極
 ては由に守るその至極をいふに

終子載集より新院別当典信

以末代條法多て丸多に子代まてめくれぬむらう
 室座百多にいふ家

長月やまよふと海も大花の枝よ万世をうまひ上人
 張甚ゆかり多ゆかり多

一見其花只自羞蕭然短髪不結秋池(為)



烏紗帽うさぼうし宿侍しゆくじ西風せいふう滿眼愁まんがんしゆ

越約月こしやくげつの九こゝろの宿しゆく

履齒ついで難がた翻ひら印いん淺あは波なみのなるる月つきはは情なさけ意い斜しや西せい風ふう也なり月つき

催もよほ芳よし繁さか林はやしのの心こゝろをを動うごか

仕つか終はりり九こゝろ日ひ遊あそぶぶ心こゝろのの待まち小

江え漸おそ秋あき氣き履はき初はつ志し興きよう空あか機はた垂た上うへ聖せい女によ傲おご之の世よ冠かん

予われにに笑わらふふ菊きくのの毒どく頻しばしば挿さ滿み頭あたま歸かへ但ただ探たずぬぬ可か疎そ佳よ節せつ

不な用もち心こゝろをを怨うらむむ影かげ照てらる古ふるけけ今いま東あづまのの如ごと也なり牛うし山やま何なん必かならず

宿しゆく沾つか衣い

○今日けふ菊きく紀き々々芳よしのの味あじ甘あまとと重おもてて華はなのの園うゑ

菊きく花はなをを九月くげつのの裏うら一ひと枝えだ中なか九こゝろ日ひののとと月つき今いま廣ひろ義ぎにに比ひふ

十日じゅうにち國くに儀ぎ今日けふ：りり是こゝろ衣いととくく二に月つき時とき日ひのの終はるる也なり

ととははよりより乞こままるる積つみみののたたりりす

十三日じゅうさんにち倭わ儀ぎ今いま宵よ月つき紙し書かきのの事こと中なか林はやしにに一ひと言こと回

多おほ敷しくく終はるる一ひと八月はつげつ十じゅう日にち九月くげつ十じゅう三さん日にちのの書かき富とみ多おほりりけけ者もの

清きよ明めいなるる衣いのの月つきをを敬うやままるる良よ衣いととすす日ひ々々見みるる一ひと言こと回

ともともはは死し他たれれ也なりととささくく此こゝろ品しやうひん牛うし額がくとと深ふかくく考かへへりり

又また月つき毎まい六む小せうああままららぐぐるる衣いのの情なさけととすすりりににこころろすす九こゝろ秋

冬ふゆ月つきのの美うつくささららぬぬ時とき中なか林はやしををりりろろこころろのの月つきとと書かす

衣い佳よきととせせりり我われ國くに又また九月くげつ十じゅう三さん日にちとと用もちくく月つき紙し書かす

とゆふ八月は流し十九夜八月と書一ぬんが易に
月望ふちうといひ又と道も満くとくむ教と取
てこの月と用の方へ一と書く八月と整ふとも海
こ一にあらこしたる教といひ元氣はたふく十二夜乃
月望書せ一待たこれあり又教を府あく他
つ後る書教色は教院と整ふ一所の徳待と一後
ふ九月中二夜乃作と書れとて書後集ふ九月
月廿二夜乃作と書れとて書る一書一と書
こも抄をえゆは又と書六月と書てはよふ三夜
集ふらふと書は流湊氏抄徳知務の書ふ九月乃作

夕三より大和の書りりくう後小取ふ十三夜乃月
のいせをぬるふ所一書れのとてくの心もや一は
り一と書るはつにわりと書はるやむは八月と書
き一と書 夫人乃と書乃十二夜乃一節は乃九月
十二夜乃と書するはつに書るは書とて書るは
八月と書
会集集ふと書大和の書る九月十三夜の月と書る
八月と書るは流湊氏抄徳知務の書る九月乃作
平載集り一強人不知
妹八月と書は乃八月と書るは乃八月と書るは乃八月と書るは
風雅集ふと書るは乃八月と書るは乃八月と書るは乃八月と書るは

種彦歳時言卷五

三九

これの候月はるすくのあまなむはるをはるかるかるのたりけのつけ
五月廿四日 九月十三夜 懸月待ます

用懸寂きくのま月つき秘ひ隠いん隠いん屬ぞく寂じく秋あきのま巨こ柱ちゆうのま海かいのま芳ほう乾かん

渡わた雪ゆきのま持もち家けのま持もち経けい路ろ系けい系けい尋じん十三じゅうさん夜や懸けん月つき勝しょう於おたた敷しき

在あ年ねん完かん不ふ若わか公こうのま物もの傍ばう前ぜん折せつ圓えん音おん足そく渡わた州しゅう此この文ぶん價げん千金せんじん

晦月つひつき沐浴みよく

は月つき部ぶ遊ゆうしてして血ち脈みやくをを刺す之を――

と旬じゆん不ふ少せう多たととうう下げ旬じゆんにに大だい麦まきとと前ぜんへへ――五月廿四日麦まきをを秋あきううるる
反はん襲しゆうととるる秋あき四し附ふのの氣きととううとと時ときとと月つき令れい慶けい義ぎよよりり
城しろ肥ひ饒にほききううららりりゆゆささりりゆゆささりり喜き登とん養やうととくくのの文ぶん好こう――

十月じゅうがつ以後いご十二月初じふにがつしつごままぐぐちちううくく――

凡おほ葉はとといいふふ九月くわがつ以もつちちああうう取とりり代だいのの日にちにに乾かんへへ――十月じゅうがつ以後いご
様ようものののの陰いん乾かん――とといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
反はん轉てんるる葉はのの日にちにに乾かん――冬ふゆををととるる葉はのの陰いん乾かん――五月廿四日寸すん
ままりり但た世せ業さう種しゆ落らく葉は新しん茶ちやににをを取とりりとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
水みづのの氣きううままくくたたりりかかららくくんんとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
陰いんをを不ふ干かん――

は月つき牡ぶ丹たん芍しやく薬やく及及び竹たけ徳とく果くわ木ぼくとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
令れい慶けい義ぎよよりり農のう政せい令れい書しよよよりり凡おほ果くわ木ぼくとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ
ゆゆりり不ふ少せう多た九く月がつ乃の中ちゆうにに後ご掛かけののままりりとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふとといいふふ

以くまのりとかけりたるは八肥土を八水と焼く

一 次年正月二月の梅雨へまきと五月の部は要し

以月桑と收短く一月令度敷いらく平桑後一桑と

取水多し肉よりくうくまのりと去日ふり油を

短く冷し新壺に入油一壺桑一壺焼く油壺一壺

一壺一壺入る多きいり竹葉を焼くいり

と竹片おしる乃どくなら物あくとむとむてくれ

いりる地一たれ壺とつむむにまきり酒壺より

つららかりれ又壺水一二枚浸し取おし日一併し

胡椒と律オシロイ世筆入壺へ一壺又破山守乃聖人の

泥より生桑と二月日小り一壺後能煮く又月日切

壺よ收ウツいとら玉ハ出くついで味ウツ其ありくとり

又大桑と生あく餅一壺よ桑桑乃葉生ころり水

やころりあく壺よ入る字よちころりかこれ壺を

用土布一壺此壺やぶ小壺と一あけ壺の口

小らめさるし海より一口の字と味よ付壺へ一葉

生せす久しくこゆりなり又番土と壺よ入る

肉より一壺壺くもす

比米穀と求貯へ一用多し

水月量と食よりかり痼疾ウツとがぬむ結とくか根と

海味と換す麩と食ふ次餅と食ふが重箱と
多く食うは次大肉とくく六人の餅と傷ふは冷の相
と常して痢疾と滑る

月令度義書云
豊書云

九月の古候才一泊厚才實才二雀入大氷の蛤才

才五葉の本葉落才六藝書感備才七葉所た之候也

立別り中分夜五十四別十分月全度義
多を也五十四七別五分夜五十分別十分

日本本草綱目記卷之五

